

周囲の事情形式に依りてこそ其の人の内部衝動は刺戟を興へられて善くならんと務め得られるのである。周囲に對する責任に裏づけられたる自由でなくて如何して眞の自由と言へようか。唯何となしに人は活動し努力することが出来るだらうか。若し出来たとしたならば其の人は重体の精神病者である。普通人間である以上は、どうしても内部の衝動を振起すべき他の條件がなくてはならない。自分の天職を意識し、自己表現の欲望に教へられてこそ活動が出来るのである。又活動せざるを得ぬのである。

藝術が内容の充實を尊びて形式を輕んぶる理由は決してない。詩歌の形式がどれ程自由であらうとも詩は詩としての「そう云ふ氣持」がある。此の「そう云ふ氣持」は一種の形式でなくて何であらう。この形式なくして詩は存在しない。人生のどん底の悲惨な叫びを体験し、人間苦を体験した人はいくらもあるであらう。併しかゝる藝術の尊重する体験をもつて立派な藝術家たるべき素質を有しながら、自己を表現するの形式を誤つてゐる故に彼等を藝術家として呼ぶことを許されないのである。

北原白秋氏が詩のリズムに重きを置かれるのも要は此處にあるのではなからうか。
内に体験と思索をはかり、外にその表現に務めんとする藝術家こそ眞の藝術家である。(完)

來るべき大戦

澤 井 謙 吉

世界はワシントン會議の結果、軍備制限が斷行されたとは云ふものゝ、永劫に亘つてとても戦争は絶わぬことは明白であらう。

ワシントン會議の影響に依つて、我が國民の心は一變した。ともすれば軍縮の世だ。中學の教練時間の縮少等の聲へ起つたが、結局軍事教育が實施せられることになつた喜ばしい事である。政府では條約に依つて軍人を減したのである。其故我等は尙更中學に於て確固たる教練を受け、一朝事あれば早速戦線に立ち得る

様にして置く必要があると考へる。主張者の米國は、果して如何なる軍事政策を取つてゐるかと言ふに、表面に於て軍備に無關心の様であるが、裏面に於ては中等學校で盛に軍事教育を施してゐるとの事である。

七千餘萬の大和國民よ、六百の彥中赤鬼健兒よ、享樂の夢より覺めよ！我が日本の前途は決して樂觀すべきではない。大いに自覺を要するのだ。世界の人口は今や十七億餘の多きに達してゐる。そして年々百分一除つ増加する我が日本の如きは百分の三餘の増加率を示してゐるではないか。所が日本は殖民地を持たぬ。最も近き滿州に於て大活動をなすべき義務を有するのだ。我等の責任は重大である。現今世界に於ては食糧過剰の状態である。併し我が國は既に不足してゐる。今より凡そ百六十年餘の後には食料と人口とが釣合を失ふに至るとの事である。

此世界人種間に於て食糧爭奪の爲、一大闘争の演ぜられねばならぬことは明かではないか。

我等は今より同人種間に於て互に團結して戰鬥力を強大にし、且文化の程度を増進し、以て敵に對し最後の優勝者とならねばならぬのである。

七千餘萬の大和國民よ!! 六百の赤鬼健兒よ!! 奮勵努力せよ。了

文苑

ある日の出来事

青山 庄之進

「さ二人とも支度をしろ」。いつも餓鬼大將でならしてゐる大工の子が手に持った棒ぎれで地面を叩きながら命令した。

生徒達に自由書に趣味を持たせ様といふ主旨で各教室を利用して全校の自由書展覧會が行はれる前日であつた。「杉本のが優等だつて本當かい」「うむそうだつてサツキ中村先生が言つてたせ」「つまねねな。一生懸命に描いたのに杉本に取られるなんて」「おれあ杉本にはかなはねわよ」そんな會話が朝から生徒仲間に話されてゐた。晝のやすみの時である。誰言ふとなく杉本は先生に描いてもらつたのだと言ひふらされてゐた。「おい杉本貴様あの繪は中村先生に描いてもらつたらんだらう」「いや僕が描いたんだ」「お前としては出来すぎてゐるせ」と大人ぶつて言ふものもあつた。杉本はねね。中村先生に描いてもらつたんだ。僕が土曜日の夕方役場に用事があつて學校の前を通つたら杉本が理科室で中村先生にかいてもらつて居たせ」ありもせぬ虚をさも手柄らしう太田が皆の前で言つた。杉本はさ

つきから皆にいやな事を言はれてゐる矢先太田にそんな事を言はれたので一時に我慢できなくなつて太田の帽子をひつつかんだ。太田は帽子を取られまいとグイと引張る。いやな音がしてひさしが千切れた。「何すんだい」太田は怒つた顔して怒鳴つた。「お前があまりもしない事を言ふからだ」「だって人の帽子のひさしを千切る奴があるかい」「馬鹿野郎いらん事を言ふからさ」「先生に描いてもらつて優等をもたらつてうれいのか」今はもう皆から言はれてむか／＼してゐた疝癪が全く太田一人に集中した。其の時第五時間目の鐘がならなかつたら二人は其場で格闘したに違ひ無かつた。

「覺つてゐろ」「あるとも」。言つて二人は其場は別れたが間もなく杉本は後悔してゐた。併し悪戯兒たちがそのまゝでは濟まなかつた。「本日例の場所に於て杉本と太田の喧嘩あり」と授業中先生に知られぬやうに小さな紙片をまはして自分達には痛い目を見る心配のない喧嘩を喜ぶ彌次馬達が放課の鐘を樂しんで待つてゐた。耳が近くて一番前の列にすはつてゐる太田の營養の悪い青白い首すじを見ると杉本は可愛想でならなかつた。誰か仲裁をして呉れればいゝがと願つてゐた。

併し彼等は此の機會をのがそうとはしなかつた。放課の鐘がなるとすぐ皆罪人の様に力無く其の癖冷く緊張した二人を取り圍んで、上級生の餓鬼大將を先頭にやはらかなクローバを踏み躪りながらいつもの遊び場所であるお寺の裏へつれて來た。

こうなつてはのがれ得ぬ運命だ。喧嘩の場所のみを圓く殘して同級生に圍まれた。太田は本包を地面に放りだして足袋や草履を汚すのを怖れてはだしになつた。杉本はそれでも誰か仲裁して呉れないかとそつと目を上げて皆をながめた時である。「杉本早くしろ」。上級生が頭の上で怒鳴つた。やむを得ず本包みをおろして帽子をぬいだ。草履などぬぐ氣にはなれなかつた。「太田しつかりやれ」「杉本にまけるな」弱い方へ同情するものもあり又富家に對する反感もまじつてゐた。皆が太田に應援するのでいくらか敵愾心がわき起つた。併し今にも飛びかゝつて來そうな太田とは餘程氣おくれしてゐた。

「何してゐるんだ早くやらねわか」「意氣地無しだなあ」彌次馬がせき立てた。太田は猛然と杉本の胸に武者振り附いた。當然かなはないとは知りながら杉本はあぶ

なくふみ堪へた。「中川わらいぞ」弱い方に勝たせたがつてゐる彌次は一齊に喝采した。太田は勢に乗じて杉本の横面を引つばだいた。引つばだかれて杉本も始めて滿身に憤りが漲りわたつた。いきなり太田の頭をなぐり續けてつき飛ばした。たふれかゝつた太田を彌次がつき戻した。それに力を得て立直るともう無茶苦茶に兩手をふりまはして前よりも一層向ふ見ずに武者振り附いた。杉本は胸ぐらをひつつかんで足をまいて相手をねち倒して馬乗りになつた。下になりながらも太田は相手のひざの邊を最後の武器である齒で噛みつけた。噛み附かれて相手が少しひるむ暇に起きあがろうとした。杉本は相手の咽喉に左手をかけ右手をあげてなぐり續けた。踏みにじられたクローバの上に半面をおし附けられたまゝ太田は兩足を無茶にばた／＼させてもがいたがどうしてもはねかへす事が出来なかつた齒をくひしばつて堪へてはゐるものゝ涙が一ぱい目に溜つてきた。何時の間にか鼻血が出て顔半面とクローバにねつとりと附いてゐた。其の時である。彌次の中の一人が「太田のお母さんが來たせ」と私語いたいつの間にか太田の妹が此の喧嘩のある事を母に注進したの

であつた。餓鬼大將はそれと聞くところ逃げろと走り出した。彌次馬も後に續いて逃げ出した。杉本もなぐる手をやめてぼんやりとながめて居たが近づいて來る太田の母の壓迫をうけて心はたゞならず波うつた。つかまつては大變と帽子と本包みもかゝへて一散にかけ出した。

涙と草の汁と鼻血にまみれてうらめしうに睨み上げてゐる太田の顔を思ひ出すと杉本は今又可愛想になつてきた。太田のお母さんはあの有様を見て僕をどんなにうらむだらう。と思ふと立つても居ても居られなかつた。あの時中村先生がきて仲裁して下さつたらと思ふと今にもワット泣き出したい様な氣持でとぼ／＼と家へ歸つていつた。

多賀の里雜感

大谷 伍平

げにやんごとなき多賀の御やしろに命請ふとてか詣らうづる數多人のゆきかひをかいま見るにつけても、世の中の縮圖を見る心地こそせらるれ。姿形といひみじく髭さへたくはへたる人の杖を打ちふりつゝ、同じき

いとありがたげなり。御祈りの進むにつれ、うなじを板間にすりつけいよよ有難げなる様しける翁あり。身を寸直にみじろぎもせで御のりの一言一句ききのがさじとする若人ありけり。やんごとなき響き渡る拍手に、かい間見のわれも知らず／＼襟正しける程に拜殿にけたたましく小兒の泣き叫ぶにすべての人皆俗界の思に歸れり。

三

能舞臺より巽の方に壽命石あり。詣うでし人々之を拜せんか、いかにすべきかなど打ち迷ひてありけり。先達とも見るべきがいと無造作に、それなる石に手をかけ扇子もて石の頭をたゞきつ、云ふなるは「その昔信心する人ありけり。某寺建立の勸進に諸國をあるきけるに齡六十三とかや、たま／＼その人此の國に來りて遂に天壽の叶ひ難きを覺たり、その使終らざるにかへすがへすも口惜き限りなりと涙にくれ果て、懸命の願を此の社に立て、云へる様、「如何にもして我に今二十年の壽命を給へ」と祈りけるに不思議や頓に足腰かろく心も晴々しければ、涙を流し御禮をのべ諸國を廻りあるきけり。その務あふせし程はまこと二十年

いで立ちなる其の友なめるに打ち向ひて「やよ、なべての店に『壽』なる字体のうかがはるるは、思ふにこの御社は『壽』に關係あるなめ」りといへばその友なめるが云ひける。「さもあらん『壽』は目出度きことの謂なれば察するに縁結びの神にてもありなんか。」と。あさましくもかたはら痛き限りなりけり。打ち出でて「同胞よ汝はやんごとなき御社に如何なる御神の鎮座しますやも知らざるなめり。いとみじき汝が姿形見るとつけても末の世のあさましさに、一思ひに汝が顔を打ちのめしたく。」と云ひ出でんと思ひしも、次なるワラジうちはき色あせて所々つぎしたるシンゲン袋を打ちかつぎたる、まめやかなる田舎人のシワガレたる聲もて、「もし、それなる若き人々よ、出雲の御神のみ尊み敬へる汝達は、カラどかアメリカどか云ひふらせる國に渡りて行き、出雲の神と尊まれんこそふさはしけれ。」と云ひののしれるをきけるいとをかしくこそ覺わしか

二

「かけまくもかしこし高きが原……………」神主の朗々たる御祈りの聲音、拜殿には老若男女居すまひを正して

翁何はとまれと御社に御禮参りしけるに、此の所まで來たりたるに足腰立たず氣も遠くなり行きて、遂に黄泉の旅にいで立てり。それをもて、土地の輩記念を建てつるが之れなり。」といとまことしやかに述べたつるを皆人聞き了り、あるは合掌し、あるはほ／＼みみてありたり。

四

かい間見の我れ今少しくまめ／＼しくやんごとなきかたちもて述べ立てさせまほしくおぼわたり。

二流れ乱打の祭大鼓の轟く程に鐵の杖つける二人の先衛の、老人物靜かに先ばらひしてあり。小供心をいやましに祭心地さすなる二流の大鼓は、その鞆々たる音にも似げなく、鎮西が引きなせる弓のごとまがれる見るかげもなき翁二人擔ぎてけり。その昔は美々しくありたりしならんとおぼゆるもわぎの素袍着なせる大人、小供數多一様にワラジ打ちうちがちて續くなる。今少しくうるはしき白妙の素袍着なせるがエボン打ちかづきて笛、笙笛、大鼓等式に做ひてまめやかに吹奏せり。之に打續きて之は又いときらびやかに心ゆくまで着なせる今様の人々、禮にかなひ式に合ひたるかたち

にて「我こそは何の某にて候」てふ面もち宜ろしく、い
さまめ／＼しくうち振舞へることゆかしけれ。

馬上の人只真向ひの天を望みてわき目せざる古人そ
のまゝのかたちもて、栗毛の馬に乗りたる。之れなむ
今日の行列に花やかな主人役をつとめる頭人にてぞあ
りける。尙打續づく古めかしき品々こそをかしくもめ
づらしけれ。終

靈仙山と其の傳説

廣瀬義景

神秘の山、傳説の山、江濃の國境に屹然として聳立
する靈仙山は、奇岩絶勝數多く實に湖國の仙境である
醒井驛より南方に進めば、右手に石灰場が見ゆ岩石を
打ち砕くダイナマイトの響きが轟然とあたりの山に反
響するの聞きながら道を急げば、三十町ばかりで上
丹生には入る。こゝより宗谷養魚場と靈仙瀧に通ずる
道がある。宗谷養魚場は鱈の養殖を行つてゐるとし
て附近は山水明媚、殊に櫻花紅葉の候の好遊覽地であ
る。こゝまでは上丹生から約二十分ばかりの道程であ
る。

瀧へ瀧へと進む路は次第に狭くなり、追々に險しく
なつて、河は何時しか小川となり、大小數多の岩石が
點綴する間を走る水は清らかで水晶の如くに澄み切つ
て、山路は更に右に左に折れて曲つて又廻り、或は樹
木生重つて太陽を遮り、冷氣腸に染む深林に入り、
或は奇岩横たはる所を押し進んで麓から十數町を經た
頃、御池白水の瀧に着く。高さ約二十尺餘樹木繁茂し
て、綠翠滴る蔭に岩の間を迸る水は二つに別れて雌瀧
雄瀧を作り、餘りは尙も幾條にも幾條にもわかれて岩
角を走り、苔に傳ふて宛然銀絲を垂れたかの様で、肅
條たる水の音は自ら涼味の湧き來るのを覺ゆる。途中
に植物學者に珍重がられる虫捕草がある。其形は開閉
自在なる毛状にして、其毛中には一種の粘液質を有し
虫の此の毛中に入り來るや直に之を閉して自己の食物
とするのである。

路はずむに隨つて益々險峻を極め、見上ぐる前面
に、然として聳立つ岩壁は屏風岩と稱へ、其の他一
門、九岩、おげそく岩、香焚岩、はやしか坂等水あれ
ば水、岩あれば岩に悉く名有り由來があつて面白い。
此の大きな自然の絶景を無二の友として、何處まで

も世を達觀して其の日を送つて居る炭焼き男、山で黒
いのは炭焼男と流行謠にも唄はれて居るロマンチック
な炭焼男の炭焼く紫の烟を眺めながら、山又山の奥深
くへ路を進めば、蝙蝠の穴がある。入口は直經五尺位
であるが、斜に上向いて、約十二間行つて左に折れ、
凡そ六疊敷き程の室が出来て居る。それより奥は不明
であるとの事で此の邊には多數の蝙蝠が住んで居るが
火を點して這入つても途中から炭酸瓦斯の爲に火の光
が細くなる位で、到底奥迄は知る事を得ないさうであ
る。更に二の門、三の門を過ぎて、愈々靈仙瀧に到着
すれば冷氣一時に身に迫つて實に爽快を覺ゆる。瀑布
は二段になつて鞆轆落下すること七十五尺、幅十五尺
岩を噛む水は玉と飛び雪と散つて、壯觀美觀言語に絶
して居る。此の瀧は又漆ヶ瀧と稱して、附近に漆の木
が多い所から僅に樵夫や獵師に名づけられたものであ
るが、現在はこゝまでの路は可成開かれて居る。此の
あたりは岸と云ふものがないから水が多くなるさへ、
らぎの音を立て、それが森や林に流れ込む。そして
低い所は池となり、高い所は島となる。こうして川と
森とがびつたりと抱き合つて、如何にも親しい自然の

コーラスをやつて居る。

こゝからが一番苦勞な路で、攀じ昇る八町餘りの險
阪は雜草生ひ茂つた細道である。草や樹を掻き分けて
漸くにして昇り切ると、此處は一面の草地になつて居
て、江濃の境界標が立つて居る。

靈仙山は三つの峯より成つて、南靈仙、中靈仙、北
靈仙とあり、此處は南靈仙で、一番高いのは中靈仙で
標高三千五百九十七尺である。こゝから靈仙山の峰が
見え又三國ヶ岳が三四丁を離れて聳て居るが、江濃
二國に跨つて居る三國ヶ岳と稱するのはちと可笑しい
氣がする。三國ヶ岳の東方にゆくりの洞と稱する廣さ
十疊敷餘の大洞穴があつて、深さは幾何とも知れず、
途中一つ段のある所までは辛くも命綱に縋つて下る事
が出来るが、それより先へは誰一人降りた者が無く、
上から差し覗けば底知れぬ深さは太陽の光線を遮ぎら
れて、周圍の岩壁は幾千年を古りたるものか凄慘の氣
に打たれて、熟視するを得ぬ程である。こゝにゆくり
女郎に就いての傳説がある。

昔此の洞穴にゆくり女郎と稱する蛇體の主が棲んで
居た。處が或る年非常な旱魃で、今も昔も變らぬ農民

の困難は一方でなかつた。すると此處に久徳村にお虎と云ふ一人の女が、諸人に代つて此の苦しみを我が身一個に引き受けて、或る日三國ヶ岳に登つてゆくり女郎に雨乞ひをしたところが、ゆくり女郎もお虎の健氣な心意氣に感じて快よく承諾したが、其の替はりお虎に再び下山の許し難きことを聞かせる、お虎も素より覺悟の事とて、それでは妾は靈仙山の主に成らうと云つてそれからはお虎ヶ池に棲んだのである。此のお虎ヶ池はこゝからまだずつと先きにある。

それからは毎年此の日にお虎とゆくり女郎とが出合ふと云ふので、四月十五日を靈仙祭と稱へ、誰れも山中へ足を踏み入れない。若し入り込んだら其の儘歸ることが出来ぬと傳へて居る。又例年二百十日前にも山を封じて人の立入ることを禁じて、それで厄日が無事にすむと、麓から數多の農民が御禮詣をして、山下に踊りをなす習慣がある。

こゝに又面白い話がある。夫は今から五十年程も以前の出来事であるが、彦根の相場師が發企で此の附近の者を説いて、禁じてある山に侵入し靈仙を穢した。と折柄二百十日の荒れで當年は甚しい不作となつた。

ヶ塚である。今小石を積んだ塚が三つあるが、これは後世人の掘るのを虞れて、どの穴かわからぬ様に三つ同じ物を造つたのだと云ふが、三つ共掘られたら同じことになる譯である。

一二町下りた所に仁平ヶ池と云ふ小さい池がある。昔丹生村の仁平と云ふ百姓が毎日此の邊に草刈りに來て居た處が、其の途中に一つの石地蔵が在つて、何時もニコ／＼笑つて居る。それで仁平は大變腹を立て、其地蔵を牛に縛り付け、ゆくりの洞穴へ持つて行て投り込んだ其の歸途、此の池迄來ると何うした機か足を踏み滑らして牛もろとも池中に落ちて死んでしまつたと云ふ傳説がある。

それから少し行くに八角七隅の御池があつて、如何なる早魃にも水の切れた事無く、雨乞ひの時村々の人が此池の邊りに焰々火を焚いて、お池の水を流すのだと云ふ。此の水が岩の間をくゞつて、御池白水の瀧となるのだと云ふ。形は琵琶湖に似て居る。次は御虎が池である。此の池は靈仙瀧の水源で、これには前述の様な傳説があるが、又次の様な傳説もある。

昔犬上郡某の殿様にお虎と云ふ姫君があつた。此姫

をこで近郷近在の農民は之れを怒り、竹槍を押し立て大擧して攻め寄せた上、山を穢した一味の者の家屋敷を焼き拂つたと云ふ大騒ぎがあつた。之れを米相事件と稱して、老人の昔話になつてゐるのである。

此處から江濃國境をなして居る尾根を傳つて、中靈仙の最高峰に至れば經ヶ塚と云ふのがあり、こゝを少し下りた所が靈仙寺跡である。白鳳九年役小角が修法の地で、養老元年越智泰澄の開基で、數百の寺院があつた。そして此の山の靈相が宛然釋迦八萬の大衆を集めて法華一乘の妙趣を説きし靈鷲山に髣髴たる處から靈仙山と名附けたとの事である。下つて神護景雲三年僧宣教山下に七個の支院を建て、弘仁二年願安工を起し僧坊十八宇を建てたと云ふ。靈仙七箇寺と云ふのは佛性寺(鳥居本村)、男鬼寺(男鬼)、莊嚴寺(莊嚴寺)、松尾寺(上丹生の山上)、大杉寺(大杉)、安養寺(犬上郡河内)、觀音寺(落合)で、今は僅に上丹生の松尾寺が残つて居るばかりである。其昔、此處に一大伽藍の建築されて居た壯麗な面影を偲べば、今は茫々たる雜草にも哀れを催さずには居られない。廢寺の際、靈仙五百餘坊の經卷を集めて埋めたと云ふのが、頂上の經

君は子を産む時に、女中に向つて妾の子を産む時には必ず見ない様にと注意せられたが、女中は不思議に思ふて戸の間より覗いて見たら、姫君は八疊敷一面の大蛇となつて子を産んで居たと云ふ。姫君は其本体を發見せられて御殿に居る事が出来ず、此の池の主となつて住んだと云ふ。

こうして色々の傳説があるが、いづれも確かな所は無い。然し此等の池は靈仙として地方人民に傳説的感化を興へ、尙ほ之等の池を絶体の靈池として尊敬するのである。何故彼等は此傳説を信するのであるか。これは只池の崇りを恐怖するの一念が其根本的要素をなすのみである。斯くして平野には文明の風が吹いて居るに係らず、彼等は傳説時代そのままの素朴的生活をなし、自然を憧憬しつゝあるのである。宗教の起源は恐怖なりと云ふが、是等の傳説の變化と進化とは、やがて宗教の起源を惹起するものではあるまいか。

中靈仙の北ペリを廻つて行くと、峰と峰との間が大きなタルミで廣大な平原をなして居て、一眸たゞ平原殆んど坦々たる道路を行くやうである。九折坂の細道を數町下つて、毛面尾と云ふ處に出る。こゝから少し

先きは老杉生ひ茂つて居て、路は愈々急になつて居る坂田郡から登つて、犬上郡の土地にはいつて、再び坂田郡の地に入つて醒井村大字榑ヶ畑に入るのである。此の坂田と犬上との境界になつた處を榑板峠と云つて杉板の榑が澤山切り出されることから名附けられたのであるが、此の峠に立つて小便をしようと、一方は坂田郡、一方は犬上郡へと流れる。そして末は琵琶湖に注いで結局又一緒になる。榑ヶ畑から上丹生まで約一里。全行程六里である。

人間の悩み

廣瀬義景

眞赤な滴り落ちそうな夕陽は、もう山の端にその影を没して、夕暗はそぞろに迫り寄り、山も森も家も、世のすべてのものが暗黒に覆はれんとして居た。向ふの山から紫の烟が濛々と立ち昇り、それが空に昇つては消えて行く。あゝ、あの呪はしき烟、その中に滅亡の人間の靈魂がさ迷つて居るのだらう。果敢なき人間の冷めたき骸は、紅蓮の焰にむさぼり

なめられて居るのだ。かうしてすべての人間は、死の神の命するまゝに、果敢なくも無惨な「生」の敗慘者となつて、火葬場の穴の中へほふり込まれてしまふ。プロレタリアのどん底に喘ぎつゝ、わづかに女工として得る娘の給料に、その日の糧を得つゝ、細い烟を立て、居た家庭、それが彼の娘に死なれて貧困生活に苦惱の叫びをあげて居る。

或は澤山の子供を持つた老婆が、彼等にすつかり死なれてしまつて、僅かな糊口に露命をつなぎつゝ、孤獨の生活に望み無き餘命を送つて居る。こうして死の神の手は何處までも、少しの同情も憐みもなしに伸びて行くのだ。

嗚呼！なんたる悲惨事だらう。これ等の人間苦の現實を吾が目前に見せつけられたる時、あまりに神の成敗の慘酷さを思はずには居られない。

然し無常の風は常に吹き暴れて居るのだ。一度白羽の矢が立てられたる時、その時は人間の「生」に對する執着も、あらゆるものに對する情熱も、すべて惨めに踏みにじられて、貧富の區別なくブルもプロも容赦

なく搔拂つて、暗黒の世界へと運び去つてしまふ。こうして人間は暗黒から暗黒へ葬り去られてしまふのである。

どこへ行くのだらう？それは吾等に與へられたる永久の謎である。獨り悄然と墓地の草の上に立つて見たまへ。死人の顔の様に青白い無数の石碑は、永遠の沈黙を續けて居るだらう。これこそ暗黒の世界——未來の國と、此の世との限界であり、そして開かれざる扉である。

そして大きな口を開いて居る土穴、これは、幾百、幾千人の魂の抜けた人間を此の世から他國へ送り出す所なのだ。屈託氣に、大きな口を開いて居るのが、如何にも呪はしい。現世に對する絶ち切れない執着の念に、まだ澤山の生靈が、あたりをさ迷つて居るかの様に思はれる。

で、人間はわづかに光明の世界を見出した。そしてそれが直に消えてしまふとは知りながら、宛もこれが永久性のものであつかの様に、明るみを見出した喜びに自己を忘れて有頂天となり、そしてこゝに喜びを作り、怒りを作り、樂しみを作り、悲しみを作り、

憂ひを作つて、又幻影の様に何處ともなく消えてしまふ。

小品

松宮誠一

十一時五十八分

「丁度今頃でしたね」「わ、そうでしたね。十一時五十八分」二度目の震災記念日を迎へた。寺院からも工場からも鐘や汽笛が盛んに鳴つてゐる内に僕は思はずツとした。暫くしてから靜かに目を閉ぢて當時をしるぶ。

「今大きい地震がいつたよ」。學校から家へ歸るなり母が僕に言つた。どうもごんよりした日だった。僕は汽車に乗つて居て少しも知らなかつた。

號外を拾つて見れば「帝都全滅!!死者二百万!!詳細目下不明」。あ、何と言ふ悲惨事だ。東京市民の五分間前の樂しき晝食を思へば、ごうかして我等は神様でありたい。灯一つだに無き帝都の廢墟に淋しく立つた時、彼等の心の底には既に強き輝きがあつた。

今は銀座には腕まくりした様な洋装の婦人が歩いてゐるかと思へば手の切れる様な折目正しいズボンを着け

た若い男がカフェーに飛込んでゐる。

電車

「御面倒ながら切符を拜見致します」と電車の一方の昇降臺から改札係が入つて來ると乗客は夫々切符を出した。僕の横に居る大阪あたりらしい三人連が居る。少し瘦せた上品なお婆さん、年は五十九か六十位だろうもう一人のお婆さんは大家の御隠居らしいが横柄な顔付をして居る。丸で忠臣藏の吉良上野をつくり。年は多分前の人と變らないだらう。それに五十餘りの男の人。吉良上野が青切符三枚出した。ははあ成程電車に特等はないから是處に居るんだな。

驛夫が出て行くと又三人が話を初めた。どうも三人は多賀へ参拜するらしい。

「それでも歸りに京で下りても仕様がおまへんな」と上品なお婆さん。

「そうやな。京都發が今晚の九時半やで」と男の人が答へる。すると例の吉良上野。

「いやわたしは一べん京で下りる積りです」。仲々決心が固いらしい。

「京で下りて、ごないにするのや」「御本山へ参るんだ

ばならぬ。課業をよそに盛り場に遊ぶ如きは沙汰の限りである。蓬髪豆を嚙つて寒燈の下に時勢を慨いた昔の學生には學ばずとも、現代の學生らしいリファインメントを失はずに、もつと質實剛健な進み方がある筈である。

然し一方には此の贅澤を敢てしながら、只外形だけ弊衣破帽の昔の質實さを殊更にてらほうとする似而非剛健學生がある。形ばかりは汗じみたタオルを腰にぶらさげ朴齒の下駄を穿いても、そのおごりその放縱はこれを裏切り、昔の學生の我慢と意氣とは滅多に見られない。昔の學生とても、弊衣破帽は決して褒めた話でなかつたが、只これに伴ふ剛健質實な學生らしい純真さがあつたがために、之が看過せられたのである。殊に弊衣破帽を用いて贅澤を盡し放縱に流れる現代學生は、只昔の學生の短所と、現代社會の短所とを併せ選んだもので、其愚これに及ぶものはない。往時の學生が濁世を見下して、昂然自ら高うし、社會を廓清しようといふ意氣を持つて居たことを考へて見ねばならぬ。師匠にまざる弟子が出ねば、世の進歩改善はとも望めない。」

す」「次の時にしなはれ」。吉良上野だまつて了つた。間もなく電車が出た。 一四、九、二〇

學生の風紀

廣瀬義景

「日本の今日の學生は以前の學生に比して、善くなつたか悪くなつたか。今日の學生が昔の學生よりも、遙かに社會的の智識を多く持つて居ることは誰しも肯定する所である。言ひ換へれば開けて居るのである。開けて居る結果としてまたそれが原因となつて、今日の學生は教室以外のものから多くの影響を受ける。教室以外に於いて經驗を求め、見聞を廣め、己を擴張することは甚だ結構であるが、其の半面の弊として諸種の社會的惡風に感染することが少くない。

言ふ所の今日の學生の弊とは、その奢侈な點であるこれに伴うて放縱遊惰の風を生じ、時に危激の思想に走る。中等以上の學校に二名以上も子弟を出し、そして家庭を離れて勉學せしめることは、中流以下の家庭では非常な重荷である。場合によつては、父兄はこのために全く犠牲となつて、尙力の足らぬことを歎せね

以上は諸君の中にも御承知の方があらうが、八月の大阪毎日新聞所載の「學生の風紀」と題する社説の一節である。私は之を讀んで、非常な刺戟を受けた。如何にも我等彥中生の急所を突かれた様に思はれる。校紀の腐敗は社會の腐敗である。我等は大いに自覺し努力して、質實剛健以て健全なる社會の有爲の人物たらねばならぬ。

海岸生活

廣瀬義景

蓆を離れると直ぐ濱へ出た。さらりと沖の方から寄せて來る浪が、ざつと音を立て、は又ざつと退く。歩むのも忘れて波の音楽に聞きこれる。

淡靄の中から隱見する漁舟、時々長閑に洩れて來る欸乃、朝暾に輝いて黄金色をして居る大海原、日の登るにつれて次第に消れて行く霞の中から、紫に光つて居る六甲山、水煙模糊のうちに眠る様に浮んで居る淡路島、これ等が今自分の眼前に展開されて居る夏の海の朝景色である。

静かなる朝の海、間も無く漁夫等の騒ぎも起るであらう。けれども今は波の音より外に耳に通ふものは無い。此の静寂の中に、はればれとする大きな心を持つて私は朝の食事さへすつかり忘れて、ぼんやりと立つて居ると、いつの間にか海の方から活動の勇氣がすうつと胸に這入り込んだ様な気がした。

家は松林の砂に建てられてはあつたが、さすが眞夏の太陽は酷熱の光を投げて、その暑熱には堪へられなかつた。然し油繪の様な美しい大阪灣の景色を眺めながら、海の水と戦つて居る時すべては忘れられてしまつた。そして刻一刻と夏の太陽は西の海へ傾いて行くのである。

一日中輝いた太陽は全くその光輝を失つてしまつて血の塊の様に深紅の色を呈しながら、鳴門の海の彼方へと沈んで行くのだつた。

正に没せんとする夕陽。

緋の雲、紅の空、金色の海、丁度七寶燒の繪の様な何とも言へない美觀を洋上に現じて居る

水に映れる金色、雲に輝く紅光、その中を走る白帆それもバット桃色に見ゆる。

く、澄み渡つた青空には、月が淋しげに青い光を放つて居る。

波は至つて静かで、ぐす黒い海面へ茫として、眼の止まる處、月光が相映じて金色に閃めいて居る。

一步、二步、三步進んで汀に立つと、ジャブン／＼と在るか無きかの様な波の音、ジューツと波に引かれる砂の音、濱の眞砂は泣いて居るかの様。耳を澄ますと、哀れな悲しい様な船唄が、沖の方からとぎれ／＼に……………
(濱寺にて)

短 文

木 村 謙 次

釣 り

八月のギラギラする太陽を受けて水面は鋭く輝いてゐる。時々ザワザワと稲穂の波を流れて來た涼風が、ソット我が頬をなでて行く。其の度に小波の立つ水面は氣持よく光つて、浮子を搖る。と動かない浮子に小さな蜻蛉が來て細い先に止つた。

浮子も動かす、蜻蛉も飛ばず、蛙が向の岸でガア／＼と短く鳴いた。

ピクリと魚が食つた。僕の手は思はず竿を握つた。

文 苑

嗚呼美なる哉！この光景！

此の壯麗な光景、深刻味の溢れる夕陽、私は實に神秘的な感に打たれるのだつた。

そして眞紅の光を浴びて獨り汀に立つて居る時、ほんたうに此大自然に抱擁され、その暖い懷に溶け込んでしまふ様な氣持ちさへするのであつた。

大きな月が今背後の松林の上に淡く上つた。まだ照つて居らぬ。天地間の神羅萬象が暮靄に包まれて、刻一刻と其色彩は神韻を帯びた灰色に化して行く、恰も世に優れた畫工が、神巧鬼技を揮つて描いて居るかの様に。

よく晴れた空には茜を帯びた白雲が、ばかりばかりと漂うて行く、其の雲の影かとも見ゆるあたりに、此の自然の大作に生々活動の氣を興へて居る白帆一雙。その背景をなせるは六甲、淡路の諸山。

寄せては返へす波の音には、吾が心を通はさずには居られなかつた。瞑目してその韻律を聞き自然の母の奏する音楽に耳を傾ける。

最早すべてのものは夜の女神の領分となつては、暗黒の中にその姿を没してしまつた。四邊は煙の様に淡

又ピクリと浮子が動く。段々はげしく食ひ出した。

小さな蜻蛉は浮子の先に止らうとしては飛び、又飛んでは止まらうとしてゐる。グーと浮子が沈んだ。今だ、と僕の頭にひびいたものがある。竿は斜に強く引き乍ら上げられた。

大きな鮒がピチピチと釣れた。笑顔はいつまでも消えない。やつと籠の中へ入れると先程の小さな蜻蛉が僕の目の前を飛んでゐる。恰も此の大漁を祝福してくれるかのやうに――。

夏の雨後

昨日降つた雨で、稻はすっかり蘇つた。小川の眞黒い水が音を立て、流れ、岸の小さな草花を洗つて居る畑の軟い胡瓜も青々とした蔓を一寸程出した。

南瓜、西瓜、皆一齊に雨晴の暑い陽氣を吸ふて居る様に覺ゆる。

ジージーと暑苦しい蟬が鳴き出した。

夏の一日

山 田 千 里

大變だ！天罰觀面、僕は惡鬼に胸を押された。ハツと思ふと惡夢は醒めた。

× × ×

短い夏の夜は明けた。日は少し上つてゐる。此んなに早くから蟬は啼いてゐる。彼等にとつては楽しい夏だ。そうして息のあるのも僅か旬日だもの大ひに楽しく暮らしたのだらう。弟を連れて裏を散策する。

ちやうど朝の涼風が一通り吹き過ぎて生々とした夏の若草が飽くまで土の香を吸ひ込んでゐる時だつた。若草に宿つた露をふみ分けながら歩を運んだ。隣の垣の朝顔が曉方の天に名残惜しく消へ去つた残月の魂を止め得たように冷々と三つ五つ咲いてゐる。亦一しきり朝風が頬をなでて去ると蟬の聲が一しきり聞えて来る

× × ×

金も融ける様な暑さだ。庭に水をまく未だ暑い。

北天の一隅に埋伏してゐた入道雲が倏忽の中にむらむらと湧起つて何の艶もない煤煙色に變つて見る／＼中に今まで所々に浮いてゐた白雲も輝いてゐた太陽も包まれて今にも夏の名物は来る様な天候になつた。彼の雲は大軍の散兵する様に東に西に南にすう／＼と擴がつて天邊に達した。夏のゆるんだ人の心を引きしめる天戒だらう、いや實際天戒に違ひない。どうだ今まで

初秋の月

山田千里

けふも李の木に一日啼き暮した法師蟬の聲も止んだ。(シンミリした哀調ある聲だ)遠山は紫色に彩色され白い浮雲が赤く照らされた思ふど、はや町には灯がついた。夕風が軽く頬をなでて過ぎる涼しい。

一浴、體を流した後で椽側に出て何を見るときもなく撒水された庭を眺めながら涼風を待つ。彼方の稻はゆるい波を作つてゐる。サツと吹き寄せた涼風に急に浴衣を着る。秋を語る虫の音が庭の仄暗い草蔭から流れてくる。松、杉の樹影黒く地に湧き出たのに驚いて見上げる。實に盆の様な月が畫から抜け出たやうに東の山の端を離れんとしてゐる。美しい實に見れば見る程美しい。

隣の垣から「お月様いくつ、十三七つ、まだ年わかいな。」可愛い富ちやんの聲が夕風に送られて耳を打つ。内からも「出た／＼月がほんの様な月が……」と妹も歌ひ出した。庭の虫も此れと合奏して月を迎へるかの様に盛にオーケストラを始めた。昔から月がよく歌はれてゐる。

弟に乳房をくはへられてゐても知らずに黄帝ではないが華胥の國に行つてゐた母さへも驚いたかの様に弟を振り離して裏に走る。弟は泣く。母は走る。

洗濯物を軒に入れる音がする途に雨は降り出した。母の聲がする。弟は雨の音に驚いたのか一層劇しく泣き出した戦場の様だ。實に夕立前の一刻は騒々しい。遂に本降りになつた。天の川の堰を取り去つた様だ。こんな烈しい降りではノアの洪水が出さうだ。庭は川となる。雨が飛石を打つて跳返る。屋根から流れ落ちる雨水がどゆを越えて瀧の様に庭にざあ／＼と落ちる目に入る限りの青葉が一葉々々雨を浴びて嬉しさうにぞく／＼と身を震はして雨中に立つてゐる。

× × ×

夕立は何時あつたと言はんばかりに日はぢり／＼と照つてゐる。空氣中の塵埃は洗ひ去られた爲か常よりは暑く感じる。夕立の中は啼き止んでゐた蟬も今の間にと言ふ様になつてゐる。庭の木の葉に雫がたまつて今にも落ちさうにして日に輝いてゐる。一羽の鳶が彼方の野の上に大きく圓を描いてゐる。日は將に沈み行かんとしてゐる。私は恍惚として落日を見送つた。

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも、

と異郷にあつて懐郷の情禁じ難くて詠じたものもあると思ふと、月々に月見る月は多けれど

と、ひびく慾張つたのもあれば
月見る月は此の月の月

吾が身一つの秋にはあらねど

この悲しみの歌もある。昔から月はさうだが特に初秋の月は悲哀に歌はれてゐる。亦圓滿のシンボルとして人に見られる事もある。

かの菅原道真も配所の月を眺めては過ぎし宮中の御宴を思ひ出して有名な詩を作つたではないか。實に月は人情の底をわぐるスプーンである。

昔の詩人の歌つた月は實に美しく清いものであるが天文學や寫眞術の發達した今日で見ると月はなんだか醜く思はれる。

月面にはシルレルとかアルキメデスとかいふ卅有餘の山脈があり、其溪が幅だけでも三哩から六哩あるといふ、直徑數十哩から百數十哩の噴火口が三萬からある

とか、月までの距離は二十三萬八千八百五十七哩あり（地球から太陽へは九千二百八十九萬七千哩あると言ふから月世界へは隣の様で飛行せんとするも無理はない）月が地球を一めぐりするのに二十七日七時四十三分十一秒餘かゝつて新月から次の新月に戻るのに二十九日十二時四十四分二秒あまりかゝるとか言ふ事が知れては非藝術的な衛星とか言ふ名を持つた、月は昔の様な神秘的な月の面影は失せて學問上の玩具の様なかたぐるしいものになつてしまつた。

實に今日の月は醜く、思はれる

然し昔を思ひ出すと初秋の月は幾分かその醜さを減じた様に思はれる。（完）

○ 鳶

山田千里

何だらう 城山の緑を破つて急に飛び出したものは。

鳶だらうか、鳥だらうか

あ、圓を描き出した。

あ、やはり鳶だ、

のんきだなー

試験に拘束されてゐる僕等の如く苦しまずに、あ、し

なからう。

風呂から上つて僕は、爽々した氣持のよいからだに、糊つけものの浴衣をひっかけ團扇一つ持つてふらりと家を出る。僕の足の向ふところは何處か？。濱邊！清い湖の黄昏を吹き拂ふ涼風を肌身に感じながら、どつかど砂の上に腰をおろす。火の様に焼けてゐた小砂がもう氣持のよい程冷めてゐる。こうしてほんやりと湖面を見つめると、今迄何事もなかつた湖面が急にキラ／＼と黄金色に湧きかへる。お、月だ！さつきから三々伍々話し合つてゐた人々は何時消へ去つたのか、あたりには人の氣配もない。ただ僕の影のみが明るい砂の上にすこい程くつきりと陰影を投じてゐるばかりだ。

今山川草木無言の靜寂を保つて、大地は益々幽邃沈靜の境に入らんとしてゐる。僕はこの神秘のうちに獨り坐して、何等かの感想を催さずには居られない。世に美しいものをたたへて、月雪花と云ふ。雪花の美しさも勿論であるが、ごりわけ僕は月夜的美觀を愛するものである。こうした寂寞の裡に、さまよふごき僕は自然の悠久と名利の忽滅を思ひ、六慾煩惱を離れて

て大自然を吾が物としたやうに青く澄んだ初夏の空を意氣揚々と廻つてゐる

愉快だらうな 初夏の日光を浴びて琵琶湖から流れて来る微風に撫でられてあのやうに自由なもの。

何か思ひついたらしい

此方へやつて来る。我が頭上を通る。流れる様に

あ、又、圓を描き出した。

實に鳶はのんきだな！。

○ 微風

彼方の稻田に波がうねつてゐる。

サラ／＼と此方の稻に傳つて来た。と思ふと心地よい初秋の微風が頬をなでて過ぎる。袂が靡く。

實に心地よい。初秋の郊外の微風は。

月下の感

西澤 與 作

焼きつける様な晝間の暑さや耐へ難い勞苦と闘つて、疲れきつてゐるからだを慰める唯一のものは風呂である。人は風呂によつて一日の暑さ勞苦をさつぱりと流し落してやつと更生の思をする。これは誰れもが經驗し享樂することであつて、あながち僕一人の感じでは

詩歌宗教の域にもみ入らずには居られない。月の光の表はす感情は、安靜、慰藉、寂寞、冥想であり人はこれによつて喜び、樂しみ、息ひ、詠嘆するのである。夜は益々更けて、坐つて居られない程冷々と肌を襲ふ様になつて来る。僕は立つて限りなく續く濱邊を逍遙し初める。そして少しでも長い間美しい月の光を浴びて、この無人の境を歩く、これが僕の休暇中の趣味であり、一日の灼熱勞苦を忘すれ、これによつて安息が與へられ、靜思が與へられ、無限、永遠、神秘の觀想が與へられ物我同体、無念無想の妙境に誘はれ、やがてその日の糧と健康との與へられたことを神に感謝するのである。

虫の聲

西居 義 雄

『地上の歌は滅びざるなり。衆鳥は暑さに負け力衰へ、涼しき樹間に隠る、時、牧場のまがきに聲聞ゆ。そはキギスなり……』とジョーンキイツの詩にある様に炎天下にギース、チョンの熱情に満ちた鳴き聲は、もうこのごろの萩の下葉に戦ぐ秋風には添はない。月明かに星稀に夜色沈々、大氣は少しく冷めて、夜露

しつとり葉末に宿す場面の登場俳優は、どうしても、鈴蟲、松蟲くつわ虫馬追、スイツチョンでなければならぬ。くつわ虫。ガチャ／＼／＼緑日の虫屋から竹籠に移して檐に吊したのでは、この虫はたゞ騒々しいばかりである。もとより松虫、鈴虫ほどの韻はないが、雑木林や藪影等で聞くと、無限の寂寞と沈静さがある。

『ガチャ／＼／＼何見て鳴あく十五夜お月さん、見て鳴あく』畦道を唄ひ連れて行く活々した子供等の讚美歌はくつわ虫の喜んで享ける事であらう。

馬追ひ。
スイト、チョンズイ、スイーッチョンなど所によつて、稱へる。蝗に似て少し小さい。色は目ざめる様な青さで、清く透とほつて居る。

『書院にも機をたてけり虫の聲』はこのスイツチョンの事で古い詩歌には機織虫と言つて居る。

松蟲。
中古名前變をしたので往古はこれを鈴虫と言つたのであつた。松虫の鳴き聲はチンチロリンで鈴の音に似て居るから、これは本家にちがいない。

ほの暗い月の夜に、河原なでしこ等の咲いた松林の中

九月の夕

西澤新藏

今沈まうとする夕陽は隣の屋根越しに僅かに紅い光を机に投げて居る。己に八月も逝つて、九月の涼しさが漸く之れに代らうとして居る夕に……。垣根にからまつた朝顔は去りにし日の元氣も今は失せて、力なくやがて滅び行く秋を恨んで居るかの如く思はれる。刻々沈み行く夕陽に木蔭はますます濃く、ザワつく風に枝を鳴らして居る。あの長い夏の日を鳴き通した蟬も何處へ行つたのか、今は一疋も姿を見せない。時々途端に落ちて蟻の餌となつて引張られて居るのを見受けるが彼等は皆あの様にして滅びて行くのだらう。……陽は全く落ちた——そしてザワついて居た風も何時の間にかハタと止つてあたりは非常に静かになり、遠くで水汲む音が聞ける様になつて來た。母の風呂たく煙は天井を傳はつて私の頭の上までくると急に軒から廣い空に見えなくなつてしまふ。よく煙の如く消けると言ふがあの樂しかつた八月の休も、蟬の聲も皆烟の如く行方も知れぬ様になつてしまつた。元氣な蟬の聲が消えて、淋しい悲しいこほろぎのこゑが之れに代り始め

でチンチロリンの聲を聞くと『秋の夜を軍に征きし、我が眷子の衣ぬひ居るとまつ虫鳴くも』の情調がよく浮んで來る。

鈴虫。
『いなご麻呂に鈴虫姫のとつぐ夜と草皆つける露の瓔珞』この虫を女性的に取扱つたのは當を得て居る。

その聲その容まことに愛らしく出來て居る。

往古松虫の名を譲つて、鈴虫の名を襲ふたが、親類づきあひは變りはないと見えて、童謡に『松虫、鈴虫チンチロリ、鈴をちよくら貸しとくれ、貸すにはおやしい事ながら、かあさんが、お嫁に行つた時、番頭にしよわせてやつちやつた』と言ふのがある。

兎に角虫と言へば哀傷的に感じた日本の詩人も、この虫には嘆美を惜んでゐない。

『萩の下かげ美しの、ひげふり立て、鈴虫の鳴く』。松林などに穴を見出して、その側をトンと踏むと、足音に驚いて鈴虫姫はヒョコリ姿を現す。それで手で伏せて、裏庭や枕許に放つと、リン／＼／＼と、『鈴虫の虫とも知らぬ鳴く音かな』の妙音を味ふことが出来る。白砂糖や鯉節が大好物で、聲もよくなるそうである。

た。賑はつて居た庭も今はすさび果て、唯獨り鶏頭が紅の花を咲かせて、樂しかつた夏の名残を止めて居るだけだ。屋根の上に高く聳つて居る木の葉も、今に秋風にさそはれて一枚二枚と散り、終には一葉をも止めぬ、みすばらしい姿となる時が來るのだ——あの紅葉散る十一月も追ひ／＼追つて來る。私達はこれから何うなるのだらうか?……こんな事を考へて居ると急に電燈がついて、あたりは一層暗くなつた様に思はれる。あ、また九月の一日は終つてしまつた。

太陽の傾く時

永田次雄

ほつとして町を出る 見渡す限り今は何となく活々として見ゆる、觀音山は左手に横たはり右手に高く八幡山がそびえてゐる、正面に見ゆるは歴史で名高いかめわり山か、其の外名も知らない山々が皆思ひ思ひの形をして横たはつてゐる、そうして西山の上一二間の所にある赤々とした夕日は一日の疲勞も見せず今日一日の平和を喜んでゐるかの様に尙暖かな懐かしい光を投げてゐる、かの諸山もよろこんで微笑みながら此の光

を受けてゐる、二三町先にある佐々木神社の森は丁度それ自身より出してゐる様な強い強い光で照らされてゐる。そして其の影には或る一種の威厳がひそんでゐる、其れと直角にかゞやいてゐる青葉の上にピラミツドの様にうき立つてゐる浄嚴院の甍は黄金をちりばめた板の様にきらきら照らされて昔の安土時代の榮華を物語つてゐる様だ……早二三町歩るいた、あたりの田畑を見ると植わつけられて間もない早苗は涼しい風の吹くまゝ、に其れに抵抗しようともせず静かに静かに動いてゐる。僕の影は刈りたての麥のにはひに濃くうつてゐる、おゝ平和の境はこゝにあるのだ。雨上りの空には雲一つなくしめつた香ある土に僕の下駄の齒の趾が鮮やかにつく丁度其の時の私の心を示してゐる様に……一歩一歩と進む小路は段々と細くなる犬の子一匹通らない静かだ平和だ。日は山の端一寸二寸になるおゝ今日の此の日もくれるのか、……太陽は沈む……あたりは尙更静かだ……

小品一題

山口久彌

城山の小高い丘を今私は下りて來た。眞夏の日は落ち

た。私は半ば運命に身を任せ半ばは自ら苦しみ上げねばならないといふ覺悟を得た。

『行かう。迷つてもかまはぬ。前途に向つて徐やかに歩みを続けよう。餘り益のない苦しみは、止めよう。此様な宿命的な考へにも誘はれた。私は餘り老人じみた心持を懐いてゐた。薄暮の氣のひし／＼とせまつてくる小徑に暫しの間私は茫然と前の様な事を考へつゝ立ち盡した。私の目には涙が浮んだ。私の胸は込み上げて來た。私は聲を上げて泣くか叫ぶかしたかつた。然しすべては駄目だつた。私は濃い夜色の中に立つてゐた。幸ひに空は晴れてゐて星の光が僅かに四邊を照して呉れた。私は内廓の道をとぼ／＼と歩いた。

彼方中學の寄宿舎には淡い電燈の光がボブラ樹の間から漏れてゐた。私は亦其の路に立ち盡した。其の路傍の家には野薔薇が繁つてゐた。折から一段と背の高い瘠せた莖の頂から一つの白い花が音もせず落ちた。噫小さな平和の死！これも自然の運命？かう私は思つた。此様な考へに耽りながら私は漸時立ち盡した。野薔薇の小さな白い花の幾つか、星の光に愈々鮮かに

盡して唯其の餘光が險しい鈴鹿の連山の頂を薄紫に照らしてゐた。眼の下の街々は僅かに全体の輪廓だけを殘して次第／＼に灰色の空氣につままれて行つた。大へん静かな夕暮であつた。私は唯一人静かに足を運んだ別に行き逢ふ人もないので小さな聲で歌を歌いながら。

『別に急ぐことはない。急いだつて同じことだ』かうした淋しい様な一種絶望的な考へが歩みにつれて私の心を牽いた、私の目には次第に涙が浮んだ。私は今人知れず苦しんでゐる。理想の方向を尋ね喘いでゐる。其處には相當懊惱がある。其れは生命の推移につれて必然的に來るべき或物が存在してゐる事を知ることが出來た。私は今將に中學の四年も半ばを越えてゐる。人が小學校を終へる頃から當然踏まねばならぬ、一の運命がある。それは一生涯の中に二度とない危機である。即ち幾何なる方向をたづねて將來進むべきであるか。それは神聖な人生に對する苦しみである。人間苦である。

物質的には如何ともする事が出來ない必然の運命である。私は此様な事を考へて私の苦しみはやゝ温められ浮いて出た。私は家路を指した。然し急がなかつた。私は静かな一歩一歩深く／＼大地の懷に抱き込まれる様な氣がした。星は天の戸を開けてしんみりとした夕暮の曲を奏で、ゐる。一種深い悲しみに酔ひ惚れて風の落ちた内廓をとぼ／＼と辿つた。私は家に歸れるだらう？

私は疲れた足を引いて漸く私の家に辿り着いた。そうして床を延べて静かに身を横へた。家の庭は星あかりで仄白かつた。

蟬

宇治原 信三

何處からか日暮蟬の聲が微かに聞えて西の山に落ちた太陽の殘光を薄れて行く夏の夕方僕は唯一人木木の間を縫ふ様にして歩いて居た。東の山は殘光に仄白く照らされては居たがもう林の中は夜氣が迫つて何となく身を小さくして行かなければすまない様な氣がして一種恐ろしささ淋しさで胸が一杯になつて居た。

通り過ぎた木木の梢を吹く風のかすかな音さへも耳の底に力強く響いて後から人でも追つて來はしまいかと

疑はれてならなかつた、
 一步一步暗くなつて行く林の中を大分歩いたと思つた
 頃やつと灰色した道らしい所へ出た。
 僕は恐ろしい物から逃れた時の様にはつとしてふりか
 へつた。ぼんやりと何かの木の葉に白い物がついて居
 るのを見つけた
 林を出て来た安心と夕暗の中に浮んで居る白い物に對
 する好氣心とでその木に近づいて行つた
 一抱へもあるその木の梢は四方の空氣に溶け込んで梢
 にあたる風がさわ／＼と音を立て、居た、
 白い物それは氣の精だらうか近づけば近づく程確かに
 動いて居る、
 少々氣持悪くなつて来た心をおさへながらちつとふる
 へて居る物を見つめた、
 白い物は一寸の間ちつとしたが思ひ出した様に又びり
 びりと動き出す
 僕は又一步近づいた
 あ、！それは今殻を出様としてもがいて居る山蟬だ！
 椋の葉の裏に眞倒まになつて居る蟬の小さな白い羽の
 表面に今土からもぐり出したばかりの若草の芽の様な

薄い緑色の條が幾條となく細々と走つて居る、
 だが細々とした線にも活氣が満ちて居る様だ
 又一寸の間動くのを止めた、多分狭苦しい殻の中か
 ら顔を出したこの若い蟬が廣々とした世の神秘的な空氣
 を吸込んでその偉大なのに驚いて居るのだらうそれと
 も又長い土の中の懐しい生活を追憶して居るのだらう
 然しその一寸の静止中でも羽のみは少しづつ、伸びて行
 く、
 二三分ちつとして居た蟬が今度は垂直になつて居た体
 をもたげて葉と並行にそろ／＼と殻からはなれたした
 ばつくりと口を開いた抜殻はたゞ一つ魂を抜き取られ
 た屍の様に冷めたく残つて居る
 伸びきつた若い蟬の羽が黒く變るのかそれとも四方が
 暗くなるのか姿がいよ／＼微になつて終に見えなくな
 つた頃は西の空に明星がうるんだ様に輝て居た
 十分の後僕は夜露のしつとりと降つた田圃路を夏の日
 中に焼きつゝす様に鳴くあの山蟬を想像しながら歸つ
 て行つた

秋の一夜

末松 四郎

一日の課業を終り、寢につかんとて、燈を消す。
 月明りにふと庭の方を眺むれば、松と檜とは青白く照
 らされたる芝草の上に、斜に影をうつせり。虫は草葉
 の下に涼しく鳴く。
 月は皎々として中天に懸り、星は金銀の砂を散らせる
 が如く、又月を守らんとせるが如く月の周圍に輝けり
 あ、何たる良夜ぞ！涼風虫聲を誘ひ笹葉の上を渡る。
 あ、何たる美觀ぞ！何たる美音ぞ！
 余は只恍惚として、ただすみぬ。

笠置山に登つて

末松 四郎

初夏の太陽のキャン／＼と下を、我々は笠置山に登つ
 た。昔から要害堅固の名を取つてゐるだけに山は峻し
 い坂ばかり。それに石ころが多い。喘ぎ／＼登る山は
 益々険しい、やがて一茶店で暫く休憩し、再び案内者
 の説明を聞きながら登つて行つた。
 やがて松の群れたつ絶頂三百餘坪の平坦地に辿りつい
 た。此所こそ五百餘年前後醍醐天皇が一時の皇居と定
 め給ふた御跡である。

さしてゆく笠置の山を出でしより

文苑

あめが下にはかくれがもなし
 の御製は坐ろに往時の天皇の御苦惱の如何はど大きか
 つたか、又如何に頼る所なくて、御心細く思召された
 かを、御察し申すに充分である。

みかのはらわきて流るる泉川

いつみきとてか戀しかるらん

ど中納言兼輔が歌つた泉川は、昔も今もかはらずに笠
 置の裾を靜に恰も笠置山に守られてゐるかの如くに流
 れて居る。
 あ、懐古すれば五百餘年前、この山の麓には北條の
 賊兵が雲霞の勢で包んだので、山は修羅場となり、矢
 叫びの聲が激しかつた事であらう。けれども今は何も
 残らず、只だ老松の風に揺られてざわめくのみである
 我々がかうした笠置山の悲惨な歴史を思ひ浮べ、懐古
 の情に恍惚とした。

満たし得ぬ喜び

知田 義一

私は涼みながら考へる——私共はどんな美食でも飽
 食すれば其の味感を減じ従つて食欲を失ふ。食欲はか
 りではない總ての慾望は人生に於ける生命の泉である

慾望の無い生活は生命の無い不幸な生活である。私は更に考へる——私共の幸福の程度は、慾望と之を遮るものとの距離に比例するものではあるまいかと。慾望が熾烈なら熾烈な程、又之を満たし得ぬ事情が多く存在すればする程、私共ではなからうかと。烈しい人間の本能と、其を常に統御せんとする理智の苦闘との、二つの力強いリズムに依つて奏で出さるオーケストラこそ眞實深刻な幸福の存する人生ではないだらうか。

漫筆數言

大久保 蘆舟

善悪正邪とか、是非曲直等といふことは、要するに時間の問題だ。眼鏡をかけること——生理的缺陷が、現代紳士の資格の一條件だとは。こんな不合理、こんな矛盾が又とあらうか。それが公然と而も得々として到る所に行はれてゐる。もう百年も経つたら——我々の孫の時代には、生理的完全な人間が却つて彼等の不具者と嘲けられるではなからうか。

理論と實際とは伴はないと言ふ。或は眞理かは知

那に漏した侮蔑とも嘲笑ともつかない笑を想像すると
き、私はたまらなく淋しい氣持に驅られる。

自分は近頃になつて因襲の弊害を痛感せずにはゐられない機會に際會する事が屢々ある。何故吾々は因襲に束縛せられねばならぬのだらうか。因襲の弊害を痛感し乍ら、尙且之に束縛されてゐるのは、夏の土用に布子を重着して、暑い暑いと唸つてゐるよりもつとつらひことであるかも知れない。彼等は何故浴衣を着ないのだらう。人間が造つた習慣や風俗の弊害を人間が認めて人間が破壊するのに何の不都合があらう。何の不思議があらう、けれどもこんな思想を抱く人を社會は、不良分子と認めるのが通例だ。甚だしきは過激者とさへ目されるのだ。

『けれども世間がね!』。自分は此の言葉を聞くと吐き出したくなる。自分はナポレオンに眞似て、『此の語は弱者の辭書のみ在り』と言はう。

途上にて知人に遇ふ。『どちらへ?』『一寸そい迄』

らないけれども一部の人は、之を楯として、兩者が伴なう時でも、尙否定しようとする。これは悪い事だ伴はない所の理論と實際とは、眞の理論と實際とではない。

級友から綽名を呼ばれると、一寸妙な顔をするものがある、否ムキになつて怒るものがある。けれどもその様な場合にはきまつて、自分は喜悅に近い或種の愉快を感じるものだ。豆腐の様に四角い、石の様に堅い本名よりも、遙かに綽名が佳い。その上、何だか彼等が自分の個性を認めてゐて呉れる様な氣がする。

自分は自惚心の強い男だ。自惚心は或程度迄自分を向上せしめた。けれども、そんなことは例外だ。自惚心は弱い人間には忽ち懐胎せられ、安産せなくて其の母親を殺すのが定例だ。

小さい、弱い狡い、人間が地上で小さな争闘を續けてゐるとき、絶對力のある或者——基督教の()のやうな——が、富士のやうな山上から見下して、其の利

アアさうですか。どうぞお静かに。『さやうなら』自分
は此の會話を大へん興味あるものと心得てゐる。日本人の不得要領さが餘りに露骨である。その儘翻譯したら歐米人は何と言ふだらう。

以上數言は八月中屋敷内の草取りをしてゐる際頭に
浮んだのを偽らず飾らず書いた迄です。草取りは厭なものです。けれども思索したり空想したりするには好い機會でした。之の拙文で私の性格の一面を覗つて下さるならば結構です。一九二五暑中休暇日誌より

狂人

深尾 喜陸

静な祈の鐘の音が夕陽に輝く鐘樓から、眼に見ゆるが如く波形をえがいて廣い田甫の空を渡る隅なくひびき渡り、又一かたまりとなつて細い細い興越路の山あひを出て行つた。

豊かな秋の收穫を夢見つ、沸ねかへる様な田の中で終日草取をしてゐたお百姓は晩鐘の姿の見わなくなる。一日一日とぐんぐん伸びる稻田をにこ〜としながら後にした。

額から出る汗は、光明の世界の燈の如く月桂樹の葉先に宿る露の如く光つてゐる。長々と寫る影は平和の像の如く、其持つ鍬は平和の神の劔の如く、あらゆるものを仕配する様な尊さがある。

然し働く事が何たるかを知らぬ彼は、無邪氣な子供の好奇心に引かれて行く様に二十世紀の敗慘者の影を引いて彼方の森をさして行く。

彼!!彼はほんとに呑氣さうだ。

雪の降つた今年の暮も、忙がしい今でも何の憂もない様に一步一步網でもひかれて行くかのやうに歩いて行く。焼くやうな暑熱の中でも「だあ」「だあ」と降る雨の中でもあてごもなく歩き廻り、口の中で誰かの口真似をするのが彼の日課の全部だ。

彼には又四季が無いのだ。此の暑い中でも「ベツチン」の足袋をはいて、二月に一度位着かへるのかしみたれたあわせを着て、つま掛の高下駄を「からん」「からん」と引づる。愉快な春も、楽しい夏も、淋しい秋も將また陰鬱な冬も彼には少しの影響も無いのだ。

こせ／＼と何時も生活におそはれてゐる人々と比べて彼は何の屈託もなく、悠々たる生活をつゞけてゐる

故郷の山によく似て居る山なりを見て、山出しの子守は泣いて居る。

工場の汽笛が静かに夕空を通つた。

ふり返つて脊の兒を見れば、今は寝つて居る。子守は鼻の先に一ばい汗をためて、獨語を言つた。

「お可愛さうに 私に歌はないので 坊ちゃんは、——
こんなに苦しんで泣いておいでだつたのだ——」

山の中の一軒家に居た時分歌一つ唱つた事のないあの時分の事を思ひ出して子守はなき出した。

ねんねなさいませ、

坊ちゃんかしこ、

山の向ふのお國には、

坊やおすきな鳥が居る。

鳥はないてる

ねんねしな。

坊ちゃんかしこことないて居る。

何處からとなく子守り唄が聞え來た。

あの人の様に歌ひたいわ。

溜息きつて空を見た。

子守の悲しみを知つてか、星は瞬いて居る。

彼はごことあてごもなく足の向き次第ぶら／＼とあるけばよいのだ。

然し彼は狂人なんだ! 外部からは實に自由で悠長であるやうに見えるが、然し彼には能力がない、伸展がない。此世に於ては彼は働く時がないのだ。只黙々として一生を歩きまはるのだ。そして遂には死んで行くのだ。たゞそれだけだ。

歌を知らない! 大橋 富造

「お歌ひよ、子供が泣くのじやないの」

「山出しは駄目ねエ」

脊の赤兒は火の付く様に泣いて居る、負つて居る子守も涙を落した。

夕日の遠山を赤く染めて 夜の漸く來た都市に山の國から遙ばる市へ來た子守りは悲しい事には歌一つ知らない。

「寝んねしなさい」——子守は自分の歌を知らないのをうらめしさうにして 頭をたれて居る。

秋が來たのだ。すゝきが静かにゆれる。

「お母さんは、あの邊りにおいでになるのかしらん」

一九二五、九、二

歸り途 大橋 富造

思はず口にした口笛があまりに大きいのに自分ながら驚いて邊を眺めて見たけれども夜は何處を人が通つて居るのか知らない様に静かだ。

長い自分の影に驚き數間を走り、水溜りに足を入れ怪物になめられた如く感じて足をすくめる事々、夜は小膽者に於ては一つの地獄を通るよりもおそろしく思はせられるのである。

やうやく戸をくゞり部屋に入つた時寒い冬にでも汗の出で居るのに恥しく思ふ——あゝ小膽者は自然の賜物をおそれて居る。しかも自分に危害を加へる様に……あの時分は少さかつた。

隠れんぼうして日が暮れて皆と一緒に「おはけー」と言つて空を飛んで歸つて息をハア／＼しながら母にすがり附いた事……何故に自分の影に驚いたのだらう。

然しながら思ひ出すと丁度影が自分をつかみに飛び掛つて來る様であつた。何處までも自分と一緒に走つて來る影を不思議に思つたのも無理はなかつたのだ。

何故に歸り途があんなに恐ろしかつたのだらうか、今は暗い途でも詩吟一遍で通つて居る己なのに、幼ない時は實に不可解な或る物が何時も小さい胸に往來して居たのだ、が今は大分疑問も解けて樂しみがなくなつた。誰かが言つた様に疑問が解ければ世は唯無意味な物である。

影と一緒に走つて來るのを不思議に思ひ、草木の成長するのに疑念を抱いた時——あの幼時の係を胸に浮べて自分獨りが微笑む。

唯自分の日に日に大きくなるのを何も不思議に思はないで——。完 一九二五、七、二六

鳴門で

大橋 富造

目が覺めた。窓からのぞむと撫養の港町の電燈の光が見ゆる。撫養港の荷卸場で人聲が盛にして居る。急がしさうに棧橋を小走りに通る人がある。朝はまだ明け切つてゐない。電燈の光りが波に動いて居る。

私は二時頃にねむつたのに違ひない。時計は五時少し過ぎを示してゐる。

昨晚一寸聞いたが、確かに五時半の出帆だと言てゐる。

た。せめて鳴門の朝景色を土産にしようと思つて甲板に出た。鳴門の關門は今、瀬音を立てて居る。大鳴門と小鳴門とを分けて居る。大岩は東の方に上る旭光に黒く影を出してゐる。其の景色は丁度渦巻く潮の中に怪物が頭を出してゐる様である。朝日に動く潮の有様がおそろしく見ゆる。船はしきりに動揺する。

私は甲板の手すりにもたれて不思議の神の悪戯を別に何んの考へもなく眺めてゐた時、後から私の肩を軽く打つ人があつた。

私の居る附近には唯一人しかそれも鳴門を見て居る人しか居らない。其の人は私の隣りに腕を立て、見てゐるのだ。

突然だつた「君!!」と隣りの人は話をしかけた。旅で私は君と言はれて見れば舊知の人に會つた様に思へて嬉れしかつた。私の神経か其の人は二年程前に會つた東京のHさんに似てゐた。

其の人は不思議さうに鳴門の方を指さして言つた。「君不思議だねエ——あの大きな岩の上に松がはわて居ますね——」不思議ですわねエ——「旅の人は私に同感だらうと言ふ様に、「不思議ですわねエ——」ともう一度

念を押して言つた。

時計を見れば五時半だ、鳴門の方は大分に静かになりかけた。出帆だ——僕は獨語を言つた。ぎい／＼と響いて來る音がする、漁船だ、汽船の側を通つた船の中にはどれたばかりと思はれる魚が白い腹を見せて動いて居る。漁夫の膚は黒く光つてゐる。

棧橋の上に立つて居た大阪商船の印を付けて居る人は漁夫に話しかけた。

「仕事して來たのか——今日はどうだい」漁夫は煙草を口から離して微笑して言つた。

「此の通りだよ——と船の中を指した。櫓をこいて居る若い人は棧橋の人に言つた。「小父さんどうだい」

若い人は煙草吸つて居る人の息子らしい。棧橋の上に喧しきは止んだ。「ボ——」出帆を告げる汽笛。二三度して船は静かに動くうすい味をしてゐる空を黒煙は通つて後へ後へ流れてゐる。

棧橋の上の人が帽子をふつてゐる。

誰を見送るのだらうと思つて下の室を見ると、盛におじぎをして居る人が居た。

鳴門はどうだらうと見ると今はもう静まつて居る旭光が静まつた海を照らして居る。

子供が濱邊に立つて兩手を揚げて居るのが少さく見ゆる。兄弟らしい、ごちらも黒い顔をして居る。

小さな農夫

北村 彌一郎

秋晴れの日も夕暮になつてさつと雲が出ると、日は淋しく沈んで行つた。家にはほの明い電燈がついた。

空はまだ明い。けれど小さい農夫は歸つて行つた。木は青い蔭を横たへ、蘆は心淋しくゆれてゐる。

小さい農夫は鎌を洗つて、その白々した刃の雫をふりきりながら細道を辿つた。細々とした月は、白い雲や黒い雲に遮ぎられては出た。夕靄は何處もこゝも襲つた。若い彼は足を早めながら、空からの響が静かに下りて、遠いものはすべて消えてゆくのを見た時、心から淋しさを知つた。

厳格な父は小さな彼をおきざりにしてあの世に行きやさない母は離れた國に旅して、まだ一度も歸らぬのであつた。彼はひとり生活して行かなければならなかつた。彼は小さな農夫であるけれど、彼が志は堅固で

あつた。併し併し、今日畑に出て知つたつらさ、初
めての苦しみは、彼の志をふなふなに曲げてしまふの
であつた。

「農夫。」「農夫。」「自分は農夫になつたではないか。こ
うなつた以上自分はこれだけ位の仕事は何だ。」

彼は勇氣を奮ひ起した。併しひとりでに涙は頬をつた
はつてゐた。

今日一日働きづめた勞働に、手や足は動かすことも
出来ない程痛んだ。彼はどうしても此のやうな仕事は
好まないのだけれど、小さな彼にはそれをどうするこ
とも出来ず、其の苦しさを忘れるようつとめるより仕
方がなかつた。

彼は誰も居ない家へ歸つた。それから夕餉の仕度を
した。ブウブウと七輪の炭は燃えて、側に居る彼の顔
を眞赤にした、彼は鐵瓶を掛けて湯の煮ゆるのを待つ
た。

小さな農夫になつた彼は目をつむると色々の事が胸
に浮んで來た。「あ、いやだ」思はずさう言つて目を開
けた時、何を見たか。彼はたちまちとして二三歩後に
さがつた。何でもないのである併し、芋蟲が頭と臂の

方どを、澤山の黒蟻にかまれてころころがつてゐ
るのだ。毒々しいその緑の蟲の色は、電燈にうつされ
て彼の目を驚かせたのであつた。

彼は立つたまゝ、動こうともせずその芋蟲を見てゐた
またころころがる。蟻はあくまで食ひついてゐる
亦ころがつて七輪の蔭にかくれてしまふ。

湯は煮わてヒーストと音を立て出したけれど、彼は
其處を逃げるやうに外に出た。

もはや世界は暗くなつてゐた。青黒い空には、黒々
とした雲の間に星がまばたいてゐる。

鐵瓶は暑さうに音を高らめてゆく。彼は亦淋しい家
に這入つて行つた。そして食事をすませた。

若し母が遠い國に行かなかつたら、若し父があつた
を訪れなかつたら、彼はいつもさう思ひながら眠るの
であつた。

あくる日は來た。そして其の淋しさは静かに忘れ
て行つた。彼は小さな時の友達とせつせと働くのであ
つた。そして少しづつながらも金をためて行つた。彼
はその少しづつたまる金の次第／＼にふたてゆくのが
何よりも樂しみである。

夏

漢 見 覺 了

驟雨模様の天氣豫報に裏切つて、カラリと晴れた空は
炎熱そのもの、太陽が在るばかり、たゞ彼の老松の間
に純白の羊毛の様な白雲がした、り相な松の緑を一層
引立てゝゐる。常には涼しげに見ゆる彼の文化住宅も
今はただ暑いものさしか見ぬ。木々に短い一生を鳴
いて終る蟬も暑さの權化どしか思へぬ。荷車引く犬の
ハツ／＼と息づく口から流れる涎が焼けきつた路上に
砂にまみれて班點を畫いて行く状は、さながら夏の苦
熱を物語る様である。直射する太陽の光にかがやく屋
根路傍に咲く月見草も埃にまみれ、花びらは疲れきつ
た様にたれてゐる、ただ太陽の光に羽根をかがやかし
スーイ／＼飛ぶ蜻蛉は矢張り夏にめげない虫である。

夏

坂 本 至 誠

夏が來た。苦しい夏が來た。働くものゝ汗をしぼる
夏が來た。苦しいけれども楽しいことも少くない。萬物
發育の時機だ草も木も伸びる、我等の心も發達すべき

時である。

夏は早起すべき時だ、朝起きの徳は三文位のもの
ではない。草も木も地も重き露に洗はれ、空氣も清く
何もかもよみがへるのは夏の朝の氣分である。

○
そうだ。誰れでも朝の氣分で一日暮したら此の一日
こそは愉快なる一日だらう。清く楽しい一日だらう。
古から神を拜するは朝だ。よい心持ちの朝。一刻でも
清い心を持てるものは幸福だ。一日清い心で居つたら
なほ結構。一年ならなほさら。一生ならこの上なしだ
朝起きはそも／＼修養の一步だ。

○
不平顔で朝起きてくるものは禍だ。茶柱の立つを見
てさへ喜ぶ朝だ。それに苦い顔とは何事だ。朝から不
快な顔して居ることは如何に人々の心を暗くすること
だらう。朝に不平あり、煩悶あり、怒罵あれば一日を
舉げて不愉快に終るのだ。一日愉快に生きようと思へば
先づ早起させよ。そして歌へ、そして笑ふべしだ。

心の清きものは神を見るのだ。つまり心の清きものは聖人だ。人は皆朝に於て、朔日に於て、お正月に於て、聖人だ君子だ。ただ永續きしないので本物にならない。然し一朝でもよい清い心の持主となることだ。この清い心を繰り返すは修養だ。朝起きは修養の第一歩だ。

夏の壯快なるは夕立だ。篠つく雷雨だ。洗流す猛雨だ。油然たる雲。沛然として降る雨。地を響かし樹枝を鳴らして降り来る雨。噫これで萬物蘇生するのだ。沈滞は物を腐敗せしめる。人心は日に新たでなければならぬ。五月雨は陰氣だ。されど夕立は痛快だ。若きものは須らく痛快でありたい。

夏は裸の節だ。何物もはだにつけることはいやだ。赤裸々に自然にふれる時季だ。空気に思ふ存分浴する時だ。心ゆくばかり水にひたる時だ。光線をやけるほど浴びるときだ。赤裸々の態度かけひなたなき行動、青竹を割つた様な気分これが若き人々の本領だ。自然と同化せよ。大我に自らをこかしこめ。夏は朝寢晝寢

けれども何もせずにも行かぬので、日課として定めておいた勉強はせぬにしても、割合頭の疲れさうにない書物等を漁り乍ら、何となく身牀のたれる晝寢時を、机の傍でごろりと横になつてゐた。

併し、さうする中に——少し遠くへ行く時は何時も感じるのだか——何か心の中に、一種恐怖に似た或物足らぬ感じがわだかまり始めた。私は、其の時からどういふものが天氣が氣になつて仕方が無かつた。天氣に何時になく落付きが無く思はれるのであつた。

大分遠いらしいが、西の方で、ゴロン／＼と何か重い物を轉して廻るやうな音がし始めた。いつも水泳に行つておそくなると、饗庭野の大砲の音をよく雷と間違へることがあるので、多分それではないかと思つたけれど、ひよつと雷ではないか、とそれと無く傍に本を讀んでゐる兄に聞いて見ると、矢張雷鳴だ、といふので、自分の心は急に何者か不安な者に掻き乱された。

暫くしてから、矢張今日行くのか、といふ事をたす爲に私は俱樂部の幹部の家へ走つた。『雨さへなければ行く。』幹部の人はかう答へた。で、私も大袈行くこ

の時でない。人生の修養に於て最も大なる好機である (完) 二〇一七—一九二

雨

居長 英三郎

あの頃は、殆んど毎日曇りが續いた。殊に朝の中はいつもぎつしりと厚い雲の層が空を覆うてゐて、日の出を拜むのが目的の大半であつた、登山には面白からぬ天候であつた。

併し約束したことだから仕方が無い、約束と言ふのは休暇になる少し前、俱樂部の中の有志者が、休中に伊吹登山をせよといふ位のことであつた。

其の日になると矢張り雲があつた。併し常よりも割合に空模様も良く、午後になると雲の色も薄らんで、

勿論空の隅の方には険しい雲もあつたけれど——私の空の天窓からはつよい日光がかつと射し込んで、部屋中をばつと明るくしてゐたので、「これなら有望だ。」と相当樂觀してゐた。

私は餘り頭や身牀を疲れさせぬやうにと氣を配つたそれは徹夜で登るのであるから、歸り道は、殊に日中なので吃度眠くなつて疲れるといふ経験があるからだ

とに方針を定めた。

併し家へ歸つて、再びあの何處か下の方からぐらぐらと來て、人の心をおびやかさずには置かぬやうな雷の音を聞くこと、やつぱり不安の念に駆られぬわけには行かなかつた。

人出の少い晝寢時に、隣家の普請に來てゐる大工の道具を使ふ音が、どん／＼とたるさうに聞えて、却つて私の不安を増すのであつた。今まで明るい光を通してゐた天窓に、俄に暗い影が往來し始めて、ふうわり白雲のうかがはれた青空に、悪魔のやうな薄暗い雲が青い部分を段々浸襲して、天窓から覗かれる總ての部分を包み、先刻からの雷鳴に交つて、雨が天窓の硝子に當るのか、と思はれるやうな音が聞けた。勿論四ツ五ツ聞けたなりで、すぐやんでしまつたが、何故か私の心は、不安な、幽鬱な方へと向つて行くのであつた。私は去りやらぬ此の不安を除かうと、時々外へ出てみたり、空を仰いでみたりしたが駄目だつた。私の心の中に芽生えた不安は、空の黒雲と同じやうに、だんだん擴つて行くのだつた。行く、行かう、と決めた以上、別に不安を感じたり、惱ましく思ふこともあるま

いに、と我自身の心に尋ねてみたが、それも無駄だった。あの場合、私には自信が無かつたのだ。あの天氣に對し、愉快に登山出来るか、といふ事について、何時もは知らぬ不安を覺けたのだ。あの落付かぬ、而も餘り面白からぬ天氣に、私の心がおびれたのだ。それ程氣の乗らぬ事ならば、きつぱりやめたらよからうに、矢張、友人の手前、約束の手前、きつぱり行かない事にする勇氣も出なかつた。そして私は、段々自信を失つて行つた。……

私はあの曇つた空を眺めて、いつそ雨にでもなつて私にもう友人の事も約束の事も憚らず、きつぱり行く事のいらぬやうになつて、此の不安を除いてくれればと心に願つて見たりしたが、空は遠雷の音に慄ふばかりで、薄暗い雲からは、遂に雨が降りさうにもなかつた。

私はもう何をする元氣も失せて、ぼんやり横になつた。行くなら行くで相當の準備もせねばならぬのだがそれさへする氣にもならず、手枕をしながら、雲の往來にぼんやりと氣を取られた。……

時計がもうすぐ四時を打たうとする頃、母も晝寢か

ら眼醒めて、臺所へ下り立つた。其の間私は相變らず横になつて、どぼけたやうな眼で、天窓から空を覗いてゐた。

すると、今まで外で遊んでゐたらしい近所の子供が急に呼んだ。「雨が降る。雨が降る」併しもう私の心は、すつかり何の刺戟を受けることも出来なくなつてゐたが、母が此の聲に驚いて、臺所から急いで裏へ行かれた足音を聞くと、自分も手傳はねばと、のつそり体を起した。

かうして物干場へ行く間に、私の心は殆ど何のやうな刺戟も効がなくなつてしまつた私の心は、再び逆轉を起し始めた。そしてだん／＼と明瞭になつて、雨を望んだ時の心の状態にかへると、私の心は急に晴れぱれしくなつた。

雨だ！私の心に決心と安神を與へて呉れる、救ひの雨だ！私の不安は、段々去り始めた。もう心配もいらぬ。「雨が降つたら行かぬ。」誓言だ！誓言だ！これこそ今では私の力強い味方なんだ。

そして、實際物干臺に立つて、冷い雨の一滴を頬に受けた時、「助つた。」と心の中に絶叫した。(完)

あらし

居長 英三郎

甚しい雨風の音に醒されて、不圖目を開いた。停電だ。昨夜に限つて消さなかつた電燈が、いつの間にか消れて、天窓がほのかに白く見える。息のつまるやうな闇と沈黙！隣の部屋からも寢息さへ洩れぬ。

昨夜からの風が益々強くなつて荒れてゐる。天窓の硝子が急がた／＼と音を立て、叫ぶやうな唸るやうな風の聲が頭の上をどつと通り過ぎた。闇、ほんとうの闇！文自も分たぬ闇！私は其の息苦しい闇の中でじつとほの白い天窓を見つめた。

風は益々荒れる。天窓のガラスを叩く雨の音さへ頻である。雨戸がごごご氣味悪う音を立てる。店でかさり！と音がした。泥棒！？極度に緊張し切つた私の神經は、あられもない想像に全く固まつてしまつた。今夜のやうな晩は餘計忍び易からう。私は全く神經衰弱になつてしまつたのだ。臺所の階段が、思ひなしかみり、と音を立てたやうだ。突然、膝のあたりを蒲團の上から、何かで壓へられたやうに感じた。心臟に寄せる血液の波が、一時に高まつて胸を打つた。全く發

作的に我彼と跳ね起きた。刹那チ、ばさばさと小走りに小さい畜生が走り去つた。チエツ！……

風が少し風いで、パツと明るく電燈がともつた。そして私は、ほつと安堵の息を吐いた。

ふんど時計が一つ鳴つた。一時かそれとも何時半だらう。そんな事を確めるのさへ私は雜作であつた。今更電燈を消すのも不安なので、私は光を背にして眼をつむつた。今度こそ安らかに眠らうと。

俄然先刻から静かだつた風が再び轟々とやつて來た雨戸や窓ガラスは、一齊にびり／＼がた／＼と悲鳴を擧げる。そして私の胸は又乱れた。その風が二回三回頭の上で渦を巻いて荒れ乍ら去つてしまつた。私は再び胸を開いて大きく息を吸うて見た。全く高調の極に達した心臟の音を數へながら。

さうしてゐる中に、また階段がかすかに鳴つて、何者かそつと枕もとへ忍んで來るやうな重々しい氣配を感じた。人か！私はじつと息をこらへた。ごきりごきり胸の鼓動は漸く高鳴りを増して行つた。そしてそのまゝその重々しさもはたど動かなくなつた。はて？私はそつと首を擡げて室中を見廻してみた。然し明るい

光の充ちた部屋の中には、唯ヒステリックな恐怖を睡の底に凄く帯びた私の淋しい姿のみであつた。なアんだ。或る不安を感じながらも、かうつぶやかざるを得なかつた。

こんな色々と恐怖に心をおびやかされて、眼はますます、汗を、神経は真午の日光の一條一條のやうに、全く鋭くなつて、もうとても眠れさうもなかつた。かうして再び眼をつむる間もなく、電燈がふつと消えてしまつた。又あの不安な闇に歸つてしまつたのだ。外は又風が荒れ出した。……

何時のまに眠つてしまつたものか、起されてみると邊は全く朝になつてゐた。風はまだ荒れてゐるらしい蒲團をはねると、しつとりと汗をかいたからだに、冷たい空氣がそつと快く觸れ乍ら通り過ぎる。起き出てみるにまだ雨戸が陰氣に閉ざされてゐる。家の中は全く陰氣だ。濕つた風が、時々戸を甚く叩いて吹き込んで来る。

戸を一枚開けて外へ出てみる。風雨まだ、狂暴である。兩側の家々の軒が、みじめにみにくく汚れてゐる。私達の先代の人々は創造的精神を缺いてゐたといふことが分るのである。

今や私達は理想の新時代建設に當つてゐるのである。私達は再び前の轍を踏んではならないのである。眞に新時代を創造するのではなくてはならない。而して其の根本は私達各自の生活の創造にあるのである。眞に生命の要求に應じた生活の創造を營むことにある。それは現在に立脚して、更に過去の歴史的考察を加へ、現實より出發するのである。そして一步一步確實なる創造を繼續し、終りに一層高く充實した眞の自己の新生活が集まつてこそ理想の新時代は實現するのである。併し過つてはいけない。未來は現在の延長であることを、理想の新時代を實現せしめんとして、現在を忘却して畫策することを。又忘れてはいけない此の如き創造はやゝもすれば空想となり、建設は破壊に止まり、幸福は禍害に終ることを。

現代の世界を見よ。眞の大偉人、大思想家を求めてゐるではないか。即ち新時代の創造に焦慮してゐる、これを成就するは私達意氣充滿したる青年でなければ出来ないことである。私達が眞に生命の要求に應じた

る。この家の戸も閉ぢられたままで通る人も無い。雨が風に煽られて地上を飛び廻つてゐる。向ひの高扉の中の木が、風に弄ばれて、前後左右狂女のやうに乱舞してゐる。隣の普請場の圍が半ば倒れて見るも危ふさうである。

今此の地上の總てを征服し盡さうとする風雨の前に人は皆不安な面持で、囚人のやうに屈從するのか。

一九二五、八、一九作

よりのよき CREATION

澤井謙吉

徳川三百年の鎖國に全く麻痺した日本民族の創造的精神が、維新でふ光りに目覺めて、新時代建設にかつた。併しそれは因襲と階級とに威嚴を繕つた世の姑息と萎靡の空氣の中に、未だ古き癡墟にあつて、徒らに新時代の幻影を追ふに過ぎなかつた。見よ、其の結果海外文化を其の儘輸入し、それを模倣し、且歐米社會の頽廢せる一面から酸酵した惡潮流まで追ふて、出來上つた新時代は餘りに内容の充實を缺き、そして浮華であつたではないか、此の原因を考へて見ると容易

生活を創造し得るに於て、私達は眞に大偉人、大思想家たり得るのである。即ち新時代を創造し得るのである。終り

T 先生

大島善太郎

T 先生、それは僕の小學四年の時に習つた先生である。或る冬の寒い日級全体のものは冷たい廊下で足ふみの教練をやらされた事がある。それも一時間ぶつ通しでやらされた、僕等はその時に泣いた、併しその爲に先生は教練を止められるやうなことは決してなかつた。そうして終ひには隣りの教室の先生から騒々しい故止めて貰ひたいとの抗議をさへ持ち込まれた位だつた。その位先生は嚴格と言ふか、兎に角徹底的に物事をやらされた、習字でも自分が満足する迄何度も何度も同じところを習はせられた。その癖清書といへば一枚も返へされなかつた。紙屑籠が清書の墓穴であつたのだ。先生の顔は今でもはつきりと眼に寫つて来る。角張つた日に焼けた黒い顔に平たい恰好のあまりよくない鼻がちよんと座つて居て何時も少ししかんだやうな一種いふにはね顔をして居られた。丈は餘り高く